



## ヒメオドリコソウ

ピンクの花が茎の回りに咲く様子が「踊り子」のように見えます。温暖な地域では年間を通じて開花し、他の花が少ない時期にはミツバチにとって、重要な蜜の供給源となります。関東地方では、3月から5月にかけて開花します。

ホトケノザと間違えられますが、日本では、明治時代中期に帰化した外来種で、最近よく見かけるようになりました。

## 目次

### 巻頭言

「共に教育するために」	小田原市教育研究所運営協議会 委員長	2
1 小さなころみ		
「小学校外国語活動に関する研究」	「小学校外国語活動」に関する研究員	3
2 小さなころみ		
「小・中連携で取り組む不登校対策 パート2」	「不登校対策」に関する研究員	4
3 学びの架け橋		
「理科好きな子を育てる学習の工夫～小中の理科学習を通して～」	理科 プロジェクト研修員	5
4 学びの架け橋		
「小中学校通して、楽しく創造するための図工・美術の学習」	図工・美術科プロジェクト研修員	6
5 ある教室から		
『お店屋さんごっこ』から見えるもの	教育指導課指導主事	7
6 研究所だより	教育指導課指導主事	8

## 共に教育するために

小田原市教育研究所運営協議会委員長



教育基本法が改正されて、その内容を受けた新学習指導要領やマニフェストが次々と示されています。改正後の教育基本法で新設されたものの中に、家庭教育の項目があります。その内容は「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」というものです。

近年、保護者が教育に対し大変関心を持ってきているといえます。その関心の中で、どのようなことを学校に期待し、学校の取り組みにどの程度満足しているのかという点は、学校評価の結果等でも大いに分析され、今後の学校運営に取り組んでいくべきことではないかと考えられます。

ある調査によると、家庭の教育方針について、保護者が「あてはまる」と回答した割合が最も高かった項目は「子どもがどういふ友だちと付き合っているかを知るようにしている」であり、93.8%にものぼっています。そして、学校が積極的に情報を公開することを強く望んでもいます。それは、「学校での子どもの様子を保護者に伝える」「学校の教育方針を保護者に伝える」がそれぞれ 94.1%、89.9%であることから言えることです。

教育に関する情報源として「学校の先生」を挙げた保護者は、そうでない保護者よりも、学校の取り組みに満足している割合が10ポイントも高いことは、教師が発信する情報が、保護者の信頼感につながり、教育に関する満足度を高める理由の一つになっ

ているのではないかと推察されます。

学校の姿勢が保護者に受け入れられることは、子どもの教育を推進していく上で大変重要であることは言うまでもありません。保護者自身も「家庭での躾や教育はこれで良いのか」と考えているケースも十分考えられます。そのような状況で、学校と家庭の双方向による情報の交換は、子どもをどのように育てたいかという一つの目標に向かった動きと言えると思います。

例えば、「子どもの様子を伝えたい」という学校の姿勢を示してみることから始めてみたらどうでしょうか。学校だより、学年通信、学級通信、中学校ならば教科通信や部活動だよりなどを通して、学校が学級の状況や指導の様子を日頃からこまめに伝えることが必要ではないかと思えます。中には既に取り組んでいる学校も多いと思えます。しかし、学校だよりと学級通信は頻繁にでているものの、学年通信は少ないとか、電話での個々の報告や相談ははっきりできているけれども、学級全体の雰囲気や指導の方針などはほとんど伝えていないなど、今後の検討を必要とするところもあるのではないかと思います。

家庭と学校の教育方針がお互いによく理解され、共に教育していくことが子どもの成長に最も良い結果をもたらすのではないのでしょうか。



## 「小学校外国語活動に関する研究」



「小学校外国語活動」に関する研究員

### 1 はじめに

平成20年3月、文部科学省から新学習指導要領が告示され、小学校では平成23年度より外国語活動の導入が決まった。しかし、学級担任が一人で外国語活動の授業を行うことに対する不安や戸惑いの声も多い。そこで平成20年度から、小学校教員3名と中学校英語教員2名、さらに元総合教育センター指導主事の碓井先生計6名の研究員により、小学校外国語活動に関する研究をスタートした。今年度は2年目であり、本研究のまとめの年を迎えた。

### 2 研究内容

#### (1) 研究1年目

文部科学省発行の「英語ノート」をもとにした年間指導計画を作成した。各単元の内容、目標、評価規準、資料などを示し、「資料」の欄には、これまで外国語活動を研究してきた小学校の研究紀要や、研究所から出された資料集などの中から、関連するページを提示した。また、より実態に合わせた運用ができるように、簡略化・合理化などの工夫を図った。例えば、「英語ノート1」の初めにある単元で扱う挨拶やジェスチャー等の内容は、全ての単元で継続的に指導した方が効果的であると考えて省略し、その分の時間を他の単元に回したり、小田原らしさを取り入れたオプションプランも加えたりして、各学校の実態に合わせて活動できるようにした。さらに、次年度の予定であった1単位時間ごとの

レッスンプランについても、現場のニーズを考え、前倒しして出来上がったものを加え、暫定版として学校現場に配付した。

#### (2) 研究2年目

年間指導計画の見直しを図るとともに、1単位時間ごとのレッスンプランの作成や、授業研究を通じた検証に取り組んできた。さらに、オプションプランや挨拶プランなどの充実を図った。

作成したレッスンプランが使いやすいものであるかどうか、実際に小学校教員3名が授業実践を行った。レッスンプランの良かった点は、学級担任が一人で授業を行うことを前提に作成したので実用的であり、授業の流れがシンプルで分かりやすいという点であった。一方改善点としては、レッスンプランに記述されている英語による会話例が少なくなりすぎてしまった点と、ゲームのイメージがつかみにくい点があげられた。そこで、レッスンプランには英語による会話例をある程度書き加えた。またゲームについては、英語ノート指導資料のページを示し、そのやり方がすぐに調べられるようにした。

#### 3 おわりに

現場の先生方にとって、平成23年度からの完全実施は不安や悩みが多いと思う。この年間指導計画やレッスンプランが、学級担任が自信を持って授業に臨むための助けになるよう、願っている。

## 「小・中連携で取り組む不登校対策 パート2」

「不登校対策」に関する研究員



「小田原市の喫緊の課題である不登校問題に対応していくために」2年間に渡り、小学校教員4名・中学校教員2名で「不登校対策に関する研究」を続けてきました。

月1回の集まりの中での一番の収穫は、お互いを知り小学校・中学校の現状を本音トークの中で知り、歩み寄ることができたことです。お互いを知ること、連絡が取りやすくなり、気になることがあるとすぐに声をかけ、対応することができるようになってきました。研究を始めて間もないころの小中学校の学校生活や教員の意識の違いに驚き、お互いに理解し合い協力する必要性を感じたことが、すべてこの研究の取り組みの土台となってきたことを改めて感じています。

多くの学校で、不登校や登校しぶりなどの不適應を起こしている児童生徒への対応に苦慮していることが伝えられています。また中学校になると不登校が増えるという現実もあります。もちろん、思春期の多感な時期という要因はあります。しかし、小学校からしてみると、「苦労してあの手この手で支えてきた児童が・・・中学校でもちゃんと支援してくれたのだろうか？」一方、中学校側からしてみると、「小学校だからできることってあるんだよね。中学校に同じことを要求されたって。発達段階があるからね。自立するためにどうしたらいいか、小学校でも考えてほしいよ。」など、本音トークの中では次々に意見が交わされました。

2年間たった今でこそお互いを理解することができるようになってきたのですが、小中学校のギャップを埋めお互いを理解するということは、それほど容易なことではありませんでした。

月1回、顔を合わせ話し合いを続け、冊子を作成する中で、「本音トーク」を冊子に載せ、みなさんに活用していただくことで、小中学校のみなさんの地域での本音トークをしていただきたいという願いが強くなりました。小中学校の教員が本音で話し合う機会を持つことで、お互いに少しずつ歩み寄り、子どもへの一貫した教育ができるのではないかと考えてきたからです。

2年間の研究をしてきて果たしてこれが成果と呼ぶことができるものかは、賛否両論であると思います。しかし、作成した冊子を是非活用していただき、ご批判、賛同をいただきながら話題に載せていただけたら幸いです。



## 理科好きな子を育てる学習の工夫

～小中の理科学習を通して～

プロジェクト研修員（理科）



研究1年目の昨年度は、科学の最先端の1つである「遺伝子組み換え」について、2年目の本年度は、大变身近で生活と切り離せない「電気」について、その授業展開を研究した。これらの授業を通して、児童・生徒の科学に対する興味を高め、日常においても科学に関心を持って生活できるような子どもになってほしいという願いで研究を進めた。

### 「遺伝子組み換え」の授業について

遺伝子については、中学校3年で学習するが、遺伝子組み換えに関しては、本来中学校でも扱わない内容である。しかし、日常生活においてはよく耳にする言葉であり、スナック菓子の袋などにも表示されている言葉である。青いバラやゴールドライスなどをとりあげることにより、科学のすばらしさに気づかせるとともに、遺伝子組み換えに関する問題点についても考えさせたいという願いのもとに研究を行った。

中学校3年と小学校6年で授業研究を行ったが、どちらも興味・関心を持って授業に取り組んでいた。遺伝子組み換え作物には、収穫量が増え、耐病性が高まるなど、大きな可能性がある反面、将来人間の生活にも影響を及ぼす可能性もある。人類にとって役立つものであるとともに、安全性が保障されていないことや倫理的な問題などを抱えていることも学習し、日常生活においても関心を持ってもらうためには大きな意味がある授業になったと考えられる。

### 「電気」の授業について

電気に関する学習は、小学校3年から中学校3年まで毎学年何らかの形で扱うことになっている。中学生がもっとも苦手とする分野が「電気」であり、理科離れ、理科嫌いの原因の1つと考えられる。電気に関する理科の授業のスタートが小学校3年であり、このころから電気の面白さ、興味深さを知ってもらい、その苦手意識を少しでも和らげ中学校の理科に取り組んでもらいたいと考え、研究を進めた。

小学校3年の授業研究では、「明かりをつけよう」という内容で、導線の長さや形に関係なく、回路になっていれば豆電球に明かりがつくことを実験で確かめた。中学校1年の授業研究では、「金属と金属でない物質を区別しよう」という内容で、身近な物質で電流の流れる物質を調べ、金属を判別するための手掛かりとする実験を行った。どちらも実験に使う材料や実験方法を自分たちで考え、与えられた課題を解決していくという実験であり、発見する楽しさや喜びを味わえる授業であったと思う。



## 小中学校通して、楽しく創造するための図工・美術の学習



プロジェクト研修員（図工・美術科）



### はじめに

「表現することが苦手な児童が増えてきている。」「自由な発想ができない児童や、生徒が増えてきている。」「表現力や技能が身に付いていない上に、中学では美術の学習の時間が少なくなっている。どうしたら創造することが楽しいと感じさせることができるだろう。」プロジェクト研修はこのような児童、生徒の実態を交流しあうことからスタートした。

### 昨年度の取り組み

20年度の研修の課題を受け、鑑賞に焦点を当て、テーマに迫ろうと考えた。研修の内容は、

- 1, 平成20年3月告示の学習指導要領から、鑑賞の内容について系統性を整理。
- 2, 授業実践「鑑賞の内容について」指導法の工夫。

を行ってきた。

小学校6年の実践では、～芸術家の心に触れて～から芸術家の作品鑑賞を通して作品に込められた思いや技法に関心を向けさせた。

小学校2年の実践では、テーマに迫るために 題材の選び方の工夫 造形遊びを含めた指導過程の工夫 鑑賞のワークシートの作成・活用を行った。

中学校では、題材「年賀状コンクールの審査員になる」という学習を通して、良い物を見つけることができる力を伸ばそうと考えた。

この研修を通して、鑑賞活動を通してお

互いの良さを伝え合うことは、次への意欲につながると感じた。また、鑑賞の観点をはっきりさせることにより、確かな鑑賞力が身に付くことや、その力が、表現力の支えになるのだろうということに気付き、鑑賞の大切さを改めて感じた。

### 今年度の取り組み

- 1, 小中を通じた発達の段階に応じた能力の整理（表現）
- 2, 小中の連携による授業研究～心もようを写して～では、中学校の美術科の教師が小学校に出向き、6年生の授業を行った。専門的な知識を持った教師が授業を行うことにより、児童が学習に引き込まれていく姿を見ることができた。授業後の感想では、表現することの楽しさを感じることができたという感想を書いている児童がたくさんいた。

この研修を通して、専門的な知識や高い技能をもった中学校の教師が、高学年の授業を行うことの有効性を感じた。今後の課題として、より効果的な小中の連携を行うためには、小中一貫した9年間を見通したカリキュラムの作成や、協同の授業実践を通して、小中の教師が授業を作りあげるといった機会を多く持つということが大切ではないだろうか。児童・生徒が「表現すること、創造することは、楽しい」と目を輝かせて活動する姿に思いを馳せながら……。今後も研修を進めていきたい。

## 「『お店屋さんごっこ』から見えるもの

教育指導課指導主事



「いらっしゃいませ！」元気に響く声。年長の園児たちのラーメン屋さんが開店しました。店員さんはおそろいの手ぬぐいを頭に巻き、保育室の友だちに声をかけています。

幼稚園での人気の遊びの一つ『お店屋さんごっこ』。年長さんたちは、遊びの中で、友だちと協力しながら、様々な工夫をしていました。ヨーグルトの空きパックで作った湯きりで麺の湯を切っていたり、ティッシュの空きボックスに黒い紙を張って作った鉄板の上で餃子を焼いていたり、もちろん麺や餃子は本物ではありませんが、自分たちが日常の生活の中で経験したことを、本物のように再現するための努力と工夫に驚くばかりでした。“よりよいものにしよう”という思いから生まれた『共同での学び』です。年少さんを招待し、張切ってお店を盛り上げる子どもたちの笑顔には、頼もしささえ感じられました。

さて、帰りの会のことです。先生が子どもたちに静かに問いかけました。「年少さんたち、ラーメン屋で少し困っていたようなんだけど、どうだった？」すると、一人ひとり、自分の考えを友だちに伝え始めました。「買い方がわからなかったみたい。今度はちゃんと教えてあげる。」「お金がなかったみたいだから、作ってあげればよかった。」「お金の作り方を教えてあげるんでもいいんじゃない。」園児たちは、自分より小さい子のことを一生懸命考え、自分の考えをきちんと話していました。そして、友だ

ちの話にしっかりと耳を傾け、その考えを受け止めているようでした。ほんの10分位の話し合いでしたが、子どもたちの中に、人と『かかわる力』が確かに育っていることを感じました。

1週間後、小学校1年生の教室でも『お店屋さん』の開店準備が進んでいました。国語の学習です。『店員さんやお客さんは、何に気を付けて聞いたり話したりすればいいか』という課題について話し合っていました。「何がほしいか、はっきり言う」「わからないことは質問する」など、CDを聞いたり自分が体験したりしたことをもとにして、話し合いを進めていました。国語の学習ですから、言葉の力をつけるためにはどうしたらよいか、先生はワークシートや発問を工夫しながら授業に取り組んでいました。また、相手を意識させ、相手に伝えるために必要なことも子どもたちに考えさせていました。スーパーマーケットやコンビニエンスストアで、ともすれば誰とも会話を交わすことなく買い物ができる現代において、『お店屋さんごっこ』という活動の意味を改めて考えさせられました。

同じ活動ではありましたが、幼稚園での学びと小学校での学びには自ずと違いがありました。しかし、『かかわる力』を育てたいという先生方の思いは同じであり、子どもたちは体験をくり返しながら、多くのことを学んでいくのだと実感しました。

# 研究所だより



今年度も、研究・研修などの所管事業を充実させる運営を心がけました。今年度の取り組みの一部を紹介します。明日の教育活動につながる充実した研修・研究をめざし、先生方にご活躍いただきました。

## プロジェクト研修公開授業

各教科における学習指導のあり方、今日的課題等について研究した成果を各学校の教育活動に生かすことを目的に、今年度も次のようにプロジェクト研修各部会の公開授業を実施しました。今年度は、校内研究担当者研修会、学習指導法研修会、足柄下教育事務所主催の初任者研修講座とタイアップした部会もありました。また、3月3日には、2年間の研究の報告会を実施しました。多くの先生方に参加していただき、ありがとうございました。

今年度の研究の報告を冊子にまとめていただきましたので、ぜひご覧ください。

研修員の先生方には、2年間にわたる研究に御尽力いただき、ありがとうございました。

教科等	月日場所	内容	参加
国語	10/30 酒匂中	走れメロス	40名
社会	2/3 三の丸小	環境を守る	29名
算数数学	11/30 白鷗中	図形の性質	19名
理科	11/20 東富水小	明かりをつけよう	9名
図工美術	12/3 豊川小	心もようを写して	9名
外国語 外国語活動	11/25 町田小	誕生日プレゼント を買いに行こう	36名
道徳	11/17 富水小	友情とは	37名

## 県教育研究所連盟研究発表大会

10月1日に座間市立南中学校で開催されました。小田原市では、平成20・21年度「小学校外国語活動に関する研究」について、譲原光子先生(芦子小)、田宮いずみ先生(新玉小)に発表していただきました。充実した研究発信の場となりました。

## 学習指導法研修会

全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、検証委員会が「授業改善の視点」として示した、「**思考を深めて、表現につなぐための学習活動の工夫**」(国語)、「**『数学的表現力』を育てるための学習活動の工夫**」(算数・数学)を視点とした授業づくりを中心に指導法の研修を行いました。

講師として、関東学院大学 山下俊幸先生(国語)、横浜国立大学 石田淳一先生(算数・数学)に御指導いただき、講話、演習、授業研究、自校での授業実践など、全3回の研修でした。



今年度は、全小・中学校より、1名ずつの参加とし、研修した内容

を自校で伝えていただくことをお願いしました。

自校での授業実践につい

て報告書をまとめていただきましたので、ぜひご覧ください。そして先生方の指導法改善、指導力向上に役立てていただければ幸いです。

小田原教育 第112号

発行日 平成22年3月16日(火)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小泉 信二

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33 - 1730